

結構、県下各地での採集例があるようで大いに喜んでいる。手許にお持ちの標本があれば、是非記録として発表して頂きたい。

(西官市での記録は本誌上に田中 稔氏が発表しておられる)。

アカマダラセンチコガネ採集・調査に挑戦を！

高橋 寿郎

アカマダラセンチコガネ *Ochodaeus maculatus* Waterhouse, 1875 は Waterhouse により “Shimabara. One specimen from a dead dog, May; a second from Tagami, an a bottle set with meat” を産地に図を入れて新種記載された種である (Trans. Ent. Soc. London, p.95-96, p. 1. III, f. 1, 1875)。Lewis も “Kiushu” を産地に記録された (Ann, Mag. Nat. Hist., XVI, p.385, 1895)。その後、加藤正世博士は “東京附近で獲られるが稀である” とし、分布を本州に原色で図説された (分類原色日本昆虫図鑑、第八輯, pl. 41, f. 1, 1933)。さらに、きれいな図をつけて詳しく解説された (昆虫界 Vol. 5, No.45, p.782-783, 1937. 武蔵野昆虫誌, p.173-174, 1938. 共に命名者名をどうしたわけか Westwood と間違っておられる。図鑑の方は正しい。ただし、武蔵野昆虫誌の方では産地を石神井・駒場とし、さらに本種は珍種と見るべきであるが、東京では時々採集される。神奈川県稻田登戸の標本があり、高尾山でも発見した。出現期は春と秋のごとくで、地上低く活発に飛翔する場合が多い。東京以外では余り採集されない様であるとある。分布は、本州、台湾となっているが恐らく、本州、四国、九州に分布しているだろうとされているが、原記載は九州産によっているのであるからこの説明はいささかおかしい)。

台湾での産は、三輪勇四郎博士の “台湾産昆虫目録 (翰翅目)” (台湾總督府中央研究所農業部報告, 第55号, p.275, 1931) に地名が掲げられている。

1950年の日本昆虫図鑑 (中根猛彦博士解説, f. 3780, p.1310) では、分布は本州、九州、動物の屍体、腐肉にくるが稀となっている。

四国からの記録は、1953年の “石鎚山と面河溪の昆虫相” の中で記録されたものが初記録になる “Kanmon, 1 ♂, VI-18, 1952, 稀” とあり、写真をつけて紹介されている (写真の解説では♀になっている) (四国昆虫学会々報 Vol. 3, Suppl. p. 68, pl. 8: 3)。

新潟県と佐渡島の記録は中根猛彦・馬場金太郎両博士のものがある（市立長岡科学博物館報 No. 4, p. 2, 1960）。

一応現在の知見では、分布として本州、佐渡島、四国、九州、台湾となるのであるが、本州、九州での産出状況はどうか文献類を詳しく調べていないので良くわからないが、いずれにしろ日本産コガネムシの中ではかなり珍しい種と言えそうである。少なくとも個体数が少ない種であると考えられる。図説は案外と多くあるので、どの様なコガネムシかは大方の方は御存知と思われる。日本にはこの種は次の様な亜種が知られており、黒沢良彦博士による分類学的論文に詳しく解説されている。

オキナワアカマダラセンチコガネ subsp. *carrinatus* Y. Kurosawa, 1968（奄美大島・沖縄島）。
イシガキアカマダラセンチコガネ subsp. *interruptus* Y. Kurosawa, 1968（石垣島、西表島：台湾）（Y. Kurosawa, Bull. natn. Sci. Mus. Tokyo, Vol. 11, No. 3, pp. 242—243, 1968）。
そして従来コガネムシ科の亜科 Ochodaeinae と扱われていたが、1988年発表の石田正明、藤岡昌介氏の“日本産コガネムシ主科目録”（LAMELLICORNIA, Suppl）では独立の科 Ochodaeidae と扱ってられる（この目録では平戸島も分布地に加わっている）。

そこで、兵庫県下における本種の産出状況はどんなであろうかと言うことであるが、県下からの記録と言うのは筆者が知っている範囲では次の3頭しかない。即ち多可郡笠形山（1 ex., 26—IX—1965, 1 ex., 27—IX—1959, K. OKAMOTO leg.）、加美町三国岳（1 ex., 31—V—1959, R. Inomata leg.）。採集者である岡本 清氏と猪股涼一博士の御好意で全部拝見させて頂いたし、岡本氏の採集されたものの内1♀（27—IX—1970）は同氏の御好意で御恵与を受け、現在筆者が標本を保管している。兵庫県下の記録はこの3頭以外筆者は知らない。或いは採集されているのが他にもあるかも知れない。それらについて御教示を頂ければと思う。

本種は加藤博士が記録しているように春と秋に採集出来るので、多分年2回の発生ではないか、よく飛び廻る様でもあるとある。野村 鎮氏も大図鑑の中で（1963）よく飛ぶ種であると記されており、林 長閑博士は6月ごろから出現し夕方によく飛ぶ、幼虫は腐植物か腐肉を食べるものと思われると記しておられる（学研中高生図鑑，昆虫Ⅱ，1975）。

最近東京の藤岡昌介氏からの御教示によると、本種が新潟県下で焼酎（しょうちゅう）トラップにより（河原などで——）案外と採集出来ているとのこと。そして、目下生態解明に取り組みたいと考えているとのことであった。

この方法は初めての知見であり、大変貴重な情報でもある。そこで、この方法も取り入れて県下の本種の分布状況調査にどなたか挑戦して頂けないものかと、ここに拙文をつづって見た次第である。勿論、筆者自身もなんとか挑戦して見たいと考えているが、一人でも多くの方々により調査が出来れば、案外多くいる種だとわかったりしないかと期待もったりしている。（兵庫県甲虫相資料・227）